

どこか気になるヨーロッパの都市④

リスボン（ポルトガル）

——だれが「宿命の女」の都をつくったか——

高橋 哲雄

人が街をつくる

「人が街をつくる」といえば、何を当り前のことを、と思われるかもしれない。人が集まれば街になるのだから。

しかし、である。「薔薇ノ木ニ薔薇ノ花サク。ナニゴトノ不思議ナケレド」と唄う人もいるではないか（北原白秋「薔薇二曲」）。それに似た「不思議」がそこにあることもたしかだ。薔薇の木に薔薇が咲くのは当然に見えてそうではない。花の咲かない木もあるし、大輪の花を咲かせ続けることは、なおのこと簡単ではない。同様に、人が集まっただけの難民キャンプさながらの大集落を都市と呼べるかどうか。なにか大きな意志・あるいは関係の力が加わらなければ都市らしい都市が生まれるかどうか。

ある都市の運命が、そこに関わりを持つことになった強烈な個性の

人によっていかに動かされ、ときには造り変えられるかといった話に絞りこむと、そうした例はけっこう多くないことがわかる。ポルトガルの首都リスボンはその好個の見本といえるだろう。

もちろん、ほかにそうした例がないではない。たとえばジュネーブ。ここはカルヴァンという類いまれな鬼子を抱え込むことで「神政都市」に生まれ変わり、間をおいてルソーというもう一人の鬼子を生むことで、啓蒙主義の故郷の一つとなる栄誉をもちえた。

しかし、リスボンはその長い歴史で少なくとも三度はそういう機会を持つことになる。

その一回目は十六世紀の大航海時代、有名なエンリケ航海王子のもと、ヨーロッパ世界の先頭を切って新世界に乗り出した艦隊基地であり交易都市としてのリスボン。莫大な富が集まり、マニエリスム建築

の華開く都市であつた。二回目は一七五五年の大地震で崩壊し、ときの宰相ポナバル候によつて面目を一新、「啓蒙の精神」を体現した都市であり、今日見るリスボンの骨格はこのとき出来上がった。三回目は二十世紀に入つての強権的な「新国家」体制構築でいったんは衰退回避を夢見させながら果たせなかつた、功罪評価のむづかしいサラザールの長期独裁下のリスボンである。

そうした経過をつうじてリスボンの街はどういう性格を持つようになつたか。一回目はあまりに有名なので以下では詳細は省く。

二つの「南蛮の旅」

残る二つのうちあたらしい方であるサラザールの長期政権時代（一九三二―六八）の前後から入ろう。

現代のリスボン旅行記を読んでいると、時期によつてこれが同じリスボンかと、あまりに印象がちがうのに戸惑わされるのが少なくな

い。

一九二四年のこと、『緑金暮春調』や『食後の歌』の詩人であり医学者であつた木下太一郎は、若き日に陶酔した南蛮情緒の源流を訪ねてのいわばセンチメンタル・ジャーニーとしてこの地を訪れた。大航海時代の残照に想いを馳せつつ、史料探究を兼ねての、パリ留学の帰途立ち寄つた旅であつたが、彼の描いた街の印象は、おそらく当人にとつても予想外に情趣を欠いたものになつた。

パリからセヴィリア経由でリスボンに着いた彼の眼に映つたのは、想像した南蛮文化の原郷とははるかに遠く、粗野でデリカシーを欠き、ベデカー・ガイドブックで「世界一騒音の多い都市」と紹介されたとおりの、喧騒を極めた都会であつた。

「リスボンに着く列車の」「二等車には乗客漲れ、彼等は遂に二等車を占領した。一等車は空虚であつたから或は横臥も出来るかと、車室を変へたら、今度は二等乗客の為に満員となつた……乗客の大部分は沿線地方の百姓たちである。皆大きな袋を背負ひ、支那の苦力が他県に出稼にゆく時の風体似ている。三等車内は混雑を極め、一漢はギターを弾じ、衆人がそれに合わせ唱歌した。光景は甚だ絵画的であつたが、同時に亦粗野であつた。葡萄牙は予の想像に於けると全く別趣の外看を呈した」

という情景に始まり、

「午前中繁華の街路を散歩す。店頭の玻璃窓のうちには何らのめづらしいものはないが、緞銀衣裳等の価の極めて廉なることを知り得る……舗石道はかなり廣い。それにも拘らず、午後三四時から夜裡にかけて、ここを通行することは甚だ困難である。人は常に佇立して動かざる群衆の間を抜け、向こうから来る人を避けて進まねばならぬ……偶々人の衝突するものがあつても敢て咎めない。人にぶつかつても謝罪の辞を陳べない」

と、大航海時代の世界をリードした都市というよりは、ヨーロッパの辺境のがさつな田舎人の町という印象なのである。

ところがそのちょうど半世紀後の一九七四年にここを訪れた劇作家で評論家の山崎正和はまったく違った印象を持った。

「リスボンは快適で、驚くべく清潔な都会であった」とまず書き出し、つづけて

「このポルトガルの首都は、七つの丘にまたがっている点でローマに似ており、河に沿って複雑な都市構造を持っている点でロンドンに似ており、そして中央にシャンゼリゼをまねた「リベルダーデ大通」が走っている点で、パリにも似ている。もちろん、リスボンはそのどれよりも小さいが、そのどれとも比較にならないほど掃き清められた町である。道にはめったに紙屑ひとつ落ちていないし、町の並木も家々の壁も、どこへ行っても勤勉な手入れの跡が現われている。偉大で華麗な町はほかにいくらかでもあるが、おそらく清潔という点では、リスボンは南ヨーロッパ第一の都会だといっても過言ではないだろう」（『海の桃山記』）

と太鼓判を押す。彼は十六世紀末の天正少年遣欧使節団の足跡を追って、澳門、ゴアとアジアの南辺を遠く回った旅の終わりに、リスボンに着いたのであった。

もつとも木下李太郎も、着いた日にホテルの窓からこの都第一のブルームナードであるリベルダード大通を見下ろしたときは、「道は広く、樹は多く、リスボアの第一印象は清潔の二字に尽くされた」と記している。この大通は一七五五年の大地震後に造られた高台の新市街を貫く百メートル幅の、テージョ河に向かって緩やかに下る一・五キ

ロに及ぶ長大な緑地公園様の並木道である。「ポルトガルのシャンゼリゼ」と称されるけれど、河を俯瞰する眺望のよさといい、道幅の広さといい（パリは七〇メートル）、中央が遊歩道となっている構成といい、本場パリをしのぐ、文字通り山手の看板通りなのである。彼のいう「清潔」は、もつとも美しく保たれている場所についての印象にすぎず、この俯瞰をもってリスボンの街全体的美観の質を律するわけにはゆくまい。しかも李太郎は続けてこうも書くのである――

「然しその左右に立ち並ぶ建築は煉瓦造りの二の町普請（二級建築）であった。殊にオベリスク形の一長大記念碑はその意匠凡庸を極めた。凡て千七百五十五年の大地震以後のものであるから、懐古的情緒を動かすに足るものは一つもない」（以上『えすばいや・ぼるつがる記』）

と。彼は相当リスボンに失望したもののようだ。

山崎正和と木下李太郎の印象の落差は、あるいは次のことに起因するかもしれない。

李太郎の旅が、それまで三年間パリに在住し、洗練された都会の空気を存分に味わったあとの、いわばヨーロッパの落魄した辺境の街の訪問だったのに対して、山崎の場合は逆に、南アジアの周辺からアフリカにかけての旧ポルトガル植民地の港を縫っての南蛮文化探訪行の果てに、初めてヨーロッパ文化圏の大都市に入ったという入り方の違いがあったのだと。ともにここを訪ねたテーマは南蛮文化の源流探しに関わるとしても。



サンジヨルジョ城からのコメルシオ広場とテージョ河

大航海時代の世界のハブ都市リスボンは、地震と津波によって多くが失われていたというもう一つのギャップも重なって、手痛い幻滅があつたのかもしれない。彼のそっけないほどの淡々たる描写——わずかに残された最良最美の遺構ジェロニモス修道院についてすら一言も触れられていない——のは、南蛮趣味に耽溺した青春への感傷旅行と

李太郎は東大医

学部で学生時代、

若き詩人として与

謝野鉄幹、北原白

秋、平野万里、吉

井勇とともに、

「五足の靴」紀行

として知られる島

原、天草などを歩

く九州の旅（一九

〇八年）に出た。

以来ポルトガルは

南蛮趣味の故郷と

して久恋の地とな

つたのに、いざ

訪れてみれば脳裏

に焼き付いていた

失われていたとい

うもう一つのギャ

ップも重なって、

手痛い幻滅があ

つたのかもしれない

しては、奇異にさえ感じられる。

しかし、両者の違いはむしろ、当時のリスボンの状況の違いをそのまま反映したと見るほうが正しいのではないか。

李太郎が遊んだ一九二四年は一九〇七年に発足した第一共和政が政治・社会不安、さらにはすさまじい財政破綻によって末期的な状況に陥りつつある時期であった。インフレの進行、銀行の相次ぐ倒産、軍部の蜂起と失敗といった事件が続発し、翌々年には共和制が崩壊し、軍事政権が成立する。一九一七年には有名な「ファティマの聖母」出現「事件」が起き、病人たちが奇跡を求めて、僻村に大挙して押し寄せ、現象が続いた。李太郎は、通った図書館でも館員のやる気のなさや不親切に触れているが、そうした世相からすれば不思議ではあるまい。

それに対して山崎の訪れた一九七四年はまさに「カーネーション革命」の年。すぐあとで説明するサラザールの四十二年に及ぶ独裁政権が彼の死によって終わり、後継のカエターノ政権にはもはや強権による市民的自由の抑圧体制を続ける力は残されていなかった。ポルトガルは牢獄から解放されたといわれた。彼の感じた「快適」はその開放感を、「清潔さ」はサラザール体制末期に観光客誘致策として推進された街の「浄化」の余光を、それぞれ映し出したものと見ることもできなくはない。

サラザール体制の実像

そのサラザールとは、一九二六年の蔵相就任以来四十二年（首相になったのは一九三二年）にわたってポルトガルに君臨してきた独裁政治家である。隣国スペインのフランコと並び称される右翼専制政権の指導者として知られた。国内政治では秘密警察を使って自由を抑え込んだ半面、徹底したデフレ政策で経済再建に成功、巧妙な中立外交で第二次大戦の戦中・戦後を切り抜けた。

フランコは第二次大戦後経済的に孤立し、観光収入を当て込んで、外人相手の犯罪には厳罰をもって臨んだため、彼の時代のスペインは奇妙に旅人には安全で過ごしやすい国であった。サラザールのポルトガルにも同じことが言われた。一九六〇年代に入って植民地維持にこだわって独立運動を誘い出し、軍事費、財政負担がさんで、さしもの長期独裁体制も末期の様相を見せ始めていた。「観光立国」を掲げて観光客の誘致に走ったのもそれを賄うためであった。

私が初めてリスボンを訪れたのは山崎の六年前の一九六八年、サラザール治世末期のことだったが、私の眼には正直、快適とか清潔という印象はなく、のちに山崎の本を読んだときはリスボンのどこのことを描いたのかと戸惑いを感じた。当時私はイギリスに留学中で、冬休みを利用してパリに滞在中の親友、昨年亡くなった仏文学の山内昶と暖かく物価の安いイベリア半島に遊ぼうと、リスボンで落ち合合わせたのである。

クリスマス・イブの前日の宵、空港からリスボンの街に入るとイリュミネーションの色も南国的に暖かく見えてほっとした。通り過ぎる街路は雑然と、とりすましたところがないのも親しみ深い感じに映った。落ち合う先のホテルに着いて、先に着いて待っているはずの山内の名を出したら、フロント氏はそんな人は予約していませんと断言し、どうしたのかと慌てる私に、しかし、と続けて、ご心配には及ばない、部屋は余っていますからと請け負って、シングルルームのキーを渡そうとしてくれた。まさにそのとき、いないはずの山内が部屋着姿でヤアヤアと迎えに出てきた。フロントは悪びれる色もなく、ご友人が着いていてよかったですね、とキーを引っ込めた。山内はタクシーの着くのが二階の部屋から見えたので降りてきてよかったですと苦笑いをし、「サラザール体制もタガがゆるんできたかな」とつぶやいた。

こういつたことはラテンの世界ではざらにあるのに、サラザールまで引き合いに出したのは、実はその四か月前に独裁者は昼寝のハンモックから転落して脳出血を起こし、執務が行えない状態にあったからだ。消息通の山内が「タガがゆるんできたか」と言ったのはそれから初めてのジョークであった。サラザールはその二年後再び実権を掌握しないままに死亡する。

「サラザールはフランコとどう違うのだろう。同じ右翼独裁といっても、ポルトガルは田舎のお殿様風というか、体質がまるで別なのかもしれない」と語りあったのがきっかけで、その旅は比較の眼を開

く修学旅行にもなった。

というのも、元リスボン駐在の外交官が書いた『真珠湾・リスボン・東京』（一九五〇年、岩波新書）という興味深い回想録を読んだことがあるからだ。著者森島守人は、第二次大戦中外相・首相として自分と渡りあつたサラザールを、現実感覚に秀いで、しかも人格高潔な、ほとんど理想の外交官・政治家として描き出していた。それを読むかぎり悪辣老獪なファッシヨ政治家フランコと同列に見なしようようには見えなかつた。森島はのちに社会党の衆議院議員になり、外務部長を務めた、私の読む限り相当な見識をもつたりベラルな肌合いの職業外交官であり、そこに示されたサラザール像はかなり信頼しているのではと思われた。さらに森島の少し前にリスボンで代理公使を務めた柳澤健也、著書『葡萄牙のサラザール』（一九四二年、改造社）で彼を、人格優れた、思いやりのあるポルトガルの救世主として描き出している。

どうして練達のプロ外交官がこれだけ入れ込むのか。サラザールが現役の首相であることへの慮りもあるう。またこの時期の彼の治世が内政でも外交でも成功していたこと、さらには柳澤の場合、日本も特高警察の時代に執筆したのだから、サラザールの強権行使を批判できるような立場でなかつたこと——そうした条件を考慮に入れても、彼らの惚れ込みようは相当なものであつたように見える。どうしてなのか。

フランコのばあいは、軍人であり共和国政府への反乱軍の司令官と

して内戦を勝ち抜くことによつて独裁者の地位を確立した。つまり多くの同胞を殺戮することによつて権力を奪取した。国際世論のなかでも敵役扱いされ、多くの非難と怨念の的になった。ヘミングウェイ、オーウエル、マルローと、内戦を描いたルポや小説のどれをとつてもフランコの側に立っているものはまずない。

それに対して、サラザールはまづたくの文人である。財政学者でコインブラ大学の若い教授であつた。自壊した共和国政権にとつて代わつた軍事政権に経済的・財政的破綻状況の処理能力がなく、国際連盟の管理下におかれる瀬戸際に立たされて、窮地に立つた軍部が拝み倒して大蔵大臣に担ぎ出した虎の子のテクノクラートだつた。全権委任を条件で引き受けたのである。彼は軍人や軍服が大嫌いであつた。全権委任、ヒットラーやムッソリーニとちがつて人前に立つのを好まず、街頭やホールではなくラジオを通じて国民に訴えかけた。私生活も廉潔で、病気に倒れたときの滞在先も一般人の利用可能な公的宿泊施設で、自腹を切つての逗留中だつた。

ところが三顧の礼で迎えられたこの書齋人はおどろくべき政治的手腕とカリスマ性を具えていて、厳しいデフレ政策によつて一年を経ずして経済の立て直しに成功し、そのあと首相、外相、蔵相を兼任する文字通りの独裁者として君臨した。彼は熱烈なカトリック信者で、「神と祖国と家族のために」を合言葉に古いタイプの社会秩序と帝国を守るうとし、そのために国内的には秘密警察体制で臨み、対外的には徹底的な現実路線——大抵の場合は日和見的中立——を採用した。

それはイエズス会的ともいえるやり方ではなかったか。

とはいえ、秘密警察も強制収容所も、サラザール体制下ではナチスのように原理主義的かつ徹底したものではなかった。拷問が行われたことで悪名高いタラフェル収容所で死亡した最初の政治犯は皮肉にも元秘密警察の幹部であり、サラザールが、共産党同様右翼過激派も嫌いであったことを示す。死亡者の数は一九三六年から五四年の間に三十二人（収容能力五百人）、六四年から七二年までで四人と、ドイツの強制収容所とは比べるべくもない。ここで八年を過ごしたアングラの作家ビエイラは代表作のほとんどを獄中で書き上げることができたし、毎日長い手紙を書くことも、語学の習得もできた。

こうした異色の、緩やかな独裁制が長期にわたって維持できたのは、彼の復古的な伝統主義が、田園地方では選挙権も個人でなく家族に付与されるという家父長的精神風土のなかでつよく支持され、弾圧の対象となる強力な反対派が存在しなかったこと、内陸の苛酷な自然条件のスペインとちがって穏やかな海洋性気候の中で育まれた気性の人びとの集まりであること、またさらには一三八六年以来という世界でもっとも長いイギリスとの同盟関係維持——それによってスペインの侵略の脅威から守られる——の必要からイギリスの世論の動向を斟酌した緩やかな独裁を選ばざるを得なかったこと——と、そうした一連の要因によってのことであった。

リスボンの歴史的アイデンティティ

さてそのサラザール体制のもとでリスボンの町はいわば冷凍保存された。木下左太郎が訪れたのと同じ一九二四年に書かれた二十世紀ポルトガルを代表する詩人フェルナンド・ペソアの手になるガイドブック『ペソアと歩くリスボン』（近藤紀子訳、彩流社）を読むと、私が訪ねた六〇年代から七〇年代の街の姿とほとんど変わっていないことに不思議な感覚さえ感じることができる。

ただそれでいて木下の訪問記に比べると、奇妙なほどの明るさに包まれているように思える。ペソアは熱烈な共和国支持者で、とくに一九一八年に暗殺されたバイス大統領に心酔し、リスボンのよさをなんとしても吹聴したかったのかもしれない。そのせいであろうか、このガイドブックはほとんどが文化遺産の紹介に終始している。建築や美術の愛好家が、いまそれを携行して街を歩いても十分役に立つといわれるほど要を得た案内書になっている。「リスボンの夜を楽しみたい人のために」という章では、いわゆるナイトライフ案内かと思うと、それがかつて貴族の邸であったクラブの、しかし豪華な建築・家具調度を誇らしげに紹介しているのである。社会状況のきな臭さは紙面からまったく嗅ぎ取ることができない。

その冷凍保存されたリスボンはおよそいつごろ生まれたのであるうか。街のかたちについてみるかぎり、それは一七五五年の有名なリスボン大地震と津波のあと、宰相であったポンバル侯の圧倒的な企画・実行力のもとに造り上げられた。じつにオスマン男爵のパリの大改造

やウィーンのそのの百年以上前のことである。十八世紀にはシチリア東部のノート渓谷を襲った地震で壊滅した都市が十幾つもみごとなバロック都市に生まれ変わった例があり、そのいくつかを訪ねたことがあるが、いずれもリスボンよりずっと小規模な町であり、また多くは少し離れた場所に新市街を造成することで、問題の幾分かを回避している。津波もなかった。

街のかたちだけではない。眼に見えぬ街のアイデンティティも、これはかなり強引に、保存、というより創造された。よくいわれるサラザール体制下のポルトガルの「麻痺」(paralysis)——ジョイスがダブリンの人びとについて使ったのと同じ評言であることに注目——の原因は「三つのF」だといわれる。ファド、フットボール、ファティマがそれで、国粹主義的な独裁政権がもつともポルトガル的として鼓吹したアイテムだが、実はそのどれも伝統的というにはかなりあたらしく、地震以前に遡るものではない。

いちばん古く見える民衆歌謡ファドも一八二〇年頃に始まり、十九世紀後半に今日のかたちになったという。サラザールの政府は大航海時代に船乗りが故郷を懐かしんだ唄に始まるという神話を創ろうとしたけれど、これは失敗。一九五四年のフランス映画、アンリ・ヴェルヌイユの「過去を持つ愛情」で歌手アマリア・ロドリゲスが唄った主題歌「暗いはしけ」で一挙にファドは世界的なブランドの座に駆け上った。しかし、サラザール時代の反動でカーネーション革命以後急速に人気はしぼむ。

脇道に入るが、この映画の原作はケッセルの小説で、一九四四年のパリ解放で復員したフランス兵(ダニエル・ジェラン)が妻の密通の現場に出くわして激昂、二人を射殺するが無罪となって、リスボンでタクシーの運転手をしている。南米行きの船待ちのつなぎ稼業である。たまたま乗せたイギリス貴族の未亡人(フランソワーズ・アルヌール)と親しい仲になるが、彼女には夫殺しの嫌疑がかかっているように刑事(トレバー・ハワード)に付きまとわれている。過去の影を引きずる男女の、異世界への脱出口というリスボンのイメージは映画「カサブランカ」でも変わらない。あれは、題名通りカサブランカでの出来事ながら、リスボン行きの飛行機をつかまえるまでの物語で、リスボンはまさに自由の象徴であった。

ちなみに私たちはこの最初の旅でファドを初めてなまで聴き、その数日後マドリッドでフラメンコを聴くことになったが、山内の評価では断然フラメンコが優位、私はどちらかというとファド派だが、正直最後の「二曲を除けば単調で重く暗く閉口した。「ファド」とは「宿命」の意味で、それが表す「サウダーデ」(憂愁)という情緒は喪失の感覚から生まれるものだそうだが、こんな陰々滅滅たる路地裏酒場の流し演歌調の唄がどうしてナシヨナリストに担ぎ出されるのかと、むしろそこにポルトガルの面白さを感じた。ソウル・ソングというには甘いが、そこがポルトガルなのだろうと思った。断っておくが私はそうした甘さは嫌いではない。のちにロドリゲスのレコードを何枚か聴いて彼女のすごさに打たれもし感心もしたものの、ファドその

ものへの印象の基本は変わらなかった。

聖母ご出現の聖地ファティマもひたすら気味の悪い民度の低さしか感じなかった。こけおどしの巨大な伽藍の前に広がる長い広場を膝から血を出しながら膝行する善男善女の姿を見ると、サラザール時代、国民は読み書きそろばんで十分との考えから、義務教育年限を共和国時代の五年から三年に引き下げたが、その報いでもあろうかと疑われた。

フットボールに詳しくない私がこの小国のサッカー帝国渴望について語ることは避けたい。ただ、私がポルトガル人なら、むしろ牛を殺さない闘牛を、スペインの、いたずらに血なまぐさいそれに比べて、本物の勇気の特徴としてみずからのアイデンティティにと担ぎ出したであろうに、と思う。徒手空拳で牛を倒して場外に押出す若者たちの行為は、剣を振るう闘牛士より気高いのではないかと。さらに言えば、大地震からみごとに立ち直った首都リスボンをこそ国民的偉大の真の象徴としてもよいのに、とも思えた。

大地震が生んだ街

リスボンはじつに姿のいい街である。いま私はヨーロッパ全図を広げながら、この小文を書いているのだが、ヨーロッパの主要都市でこの町ほどロケーションの美しさに恵まれた都市がほかにあるだろうかといふ。

まず大きな、水量豊かな河の河口に近い。港湾都市としての第一の資格である。河らしい河のないマドリッドやベルリン、エディンバラ、ミラノなどに比べてはもちろぬ、単なる河川港であるバリ、プラハ、ウィーンに比べても港としてのつよみははるかに大きい。しかし、リスボンの場合は津波の被害をも大きなものにした。河口から上がってきた津波は高さを増して、地震で壊滅状態にあった市街地を呑みこんだ。

リスボンを美しい街にしたもうひとつは、ローマと同じといわれた「七つの丘」の存在である。ただローマの場合は平坦な土地から低い台地様の丘が間をおいていくつか盛り上がっているという、どこか散文的な趣きを脱し得ないのに対して、リスボンは河からの傾斜地のつ



サン・ジョルジュ城から見た下の街。中央に名物のエレベーター。遠くに霞むは4月25日橋。

づきがそのまま、いくつもの小さなピークをつくりだす、変化に富んだ劇的な風景になっている。それぞれのピークには城や教会、展望公園などがあり、だからこの町はじつに展望台が多い。それぞれの展望台に這い上がる斜面にはぎっしり白い壁、オレンジ色の屋根の建物が貼りついていて、丘同士が互いの美しい横顔を誇示しあっている。

街の中心線を河ぞいのコメルシオ広場からゆっくり登り詰めて行くことやがて通天閣に似た塔屋が姿を見せる。それが街頭エレベーターで、上の街へ運んでくれる。もとの道をさらに進むと街の中心ロツシオ広場に着く。その辺りから始まるのが地震後出来た広大な新市街である。木下李太郎が泊まったホテルから見下ろしたリベルターデ大通りを中心とする一大都市公園で、海に向かって二キロもゆるやかに下ってゆくスケールの大きい景観はちよつと類がない。

リスボンがあたらしい市街に生まれ変わった経緯について改めて述べておきたい。

一七五五年一月一日、万聖節の朝に起こったマグニチュード九（リヒター・スケールによる。同じ尺度で東日本震災は八・九）と推定される地震と最大一五メートルに及ぶ津波、それにつづく六日六夜の火災は丘の下の旧市街を壊滅させた。中世以来の街並みはアルファマの丘を除いてすべて失われた。二十万人とも二十七万五〇〇〇人ともいわれる住民中、死者は当時三万人とも四万人ともいわれた（現在の、より信頼度の高い一推計では一万人）、国王は早朝にミサを終えた後安全な郊外に出ていてそこで地震に遭ったが、あまりのおそろしさ

に閉所恐怖症になり、郊外の丘の上にテント村をつくって生涯——震災後一二年間——そこを宮殿とした。フランス大使は混乱のあまり本国に報告を送ったのは二週間後、パリに第一報がとどいたのは一月二四日のことであった。ロンドンには一〇日に着いていた。

イベリア半島の南部はいうまでもなく、タンジールなどモロッコの太平洋岸の町も崩壊し、アイルランドにまで三メートルの津波が押し寄せた。全ヨーロッパは震撼し、この世の終わり、最後の審判の訪れかと戦いた。

もつとも信仰の篤いカトリック国での出来事であり、それも万聖節のミサ中であつたため教会の倒壊による圧死が多数、さらにはろうそくの火による火災類焼の多数発生とあつて、キリスト教の信仰に動揺が生まれた。

知識人の間にも衝撃が走った。十八世紀は「ヴォルテールの時代」と言われしヨーロッパ啓蒙主義をリードした知の巨人はただちに長編詩「リスボンの災厄についての詩」を書きあげる。これは神への絶望的な問いかけともいうべきものであつた。この世が最善の世界というのなら、なぜ何の罪もない人びとが犠牲になつたのかを問い詰めるかたちで神の秩序に反抗し、ライブニッツやポーブラの予定調和説に公然たる批判を開始する。つづく小説『カンデイード』でもリスボンの大惨事に際会した最善説を奉じる主人公を絶望に落とすことによつて、その立場を明確にした。

若いカントもこの地震に衝撃を受け、まず地震の科学研究から学



1775年の大地震下のリスボン。手前は津波が押し寄せたテージョ河。

に明確なかたちをとった。なかでも災害からの回復は待たなしの課題であり、実務家はただちに答えを出さねばならなかった。ポルトガルの宰相ポンバル侯が啓蒙主義の申し子のような人物であったことはリスボンに幸いした。教会と異端審問所は災いを異端者、不信仰者のせいにしてスケープブートをつくり処刑するといった旧態依然たる愚

問の経歴をスタートさせたところに興味を引く（カント全集第一〇巻）。彼ののちの「崇高」の美学も、自然の底知れぬ怖しさへの実感的な認識に基礎を置いていると言われる。すでに一八世紀のヨーロッパをとらえつつあった啓蒙主義はこの地震を機

挙に出たが、対照的にポンバルがいち早く処刑したのは火事場泥棒その他の略奪者であり、それもまず丘の上に処刑台を立てて、見せしめの公開処刑を行った。震災による遺体処理は軍隊の手でおこなった。教会が受け入れない海洋投棄を実施することによって疫病の蔓延を防ぐためである。また郊外・地方で消防隊を組織して市街地に送りこむとともに、軍隊に街を包囲させて青壮年の逃亡を防ぎ、再建のための労働力を確保した。テントを設営し、生活必需品の価格暴騰を取り締まった。

一月後には主任技師ミクイエル・ダ・マイアは再建プランを提出、王と宰相は五つの選択肢から転都案や安上がりの廃材リサイクル再建案、一部道路拡幅案などを退けて、旧市街の全面的改造構想を採用するとともに、民間人による勝手な建設工事を禁じた。三年後再建プランができる、地主はそれに合わせて建物を建てることが要求され、五年以内に建設できないと他人に権利を譲らねばならなくなった。多くの貴族が丘の上に追いやられ、旧市街は新興階級であるブルジョワジーのビジネス中心の碁盤目状の街として再建された。河に面した中心の広場から王宮も追い出され、名前も「商業広場」に変わった。丘の背後の広大な緩斜面は中流以上の住宅地をめぐらす緑地公園新都市として造成されることになった。十年後に建設が始まった有名なエディンバラの碁盤目の新市街に似て、さらにスケールの大きいプランである。

しかも新しいリスボンは世界最初の耐震建築都市たることが求めら

れた。道路幅は建物の高さの三倍以上とすること、建物の高さは制限され、教会も例外とされないこと、耐震実験が木製の縮小モデルハウスを兵士が足を踏みならして行進することによって行われ、出来た規格に合わぬ建物は許可されないこと、といった規制が課せられた。ポルトガル全土の教区に質問票が配られて、地震の前後に動物の不審な動きや井戸や泉の変化といった徴候がなかったかに始まり、時刻、持続時間、方向、波の高さ、大地のひび割れ、余震、といったふうに、現代でもそれだけ完全なものは難しいと言われるほどの周到な調査がなされた。これは近代的な地震研究の基礎となったといわれている。

木下李太郎が「煉瓦造りの二の町普請」とこきおろしたのは、実はポンバル様式と呼ばれる地震後のスピードと経済性を重視して造成された速成の市街であるが、それは意外にというか、さすがにというべきか、二世紀半の風雪に耐えて、今日も、バロックとしては装飾性の少ないのが却って幸いしたと思わせる小さっぱりとした家並みを演出し、全体としてリスボンの街の明るさ、軽やかさをかたちづくっている。山崎正和のいう「快適で清潔」な印象の大きな部分はこの醸し出されているのではないか。

光と影の交錯

他方、これだけ思い切った施策が取れたのは、ポンバル侯に王の絶

対的な信任が与えられたからだけではない。彼は反対勢力の排除においても徹底していた。有力貴族は処刑され、イエズス会は追放、異端審問所は解散して国立裁判所に吸収された。地震復興策だけではなく、彼の啓蒙的な改革のすべてには光だけではなく、専制の暗い影も伴っていたかに見える。成りあがりで見られ敵の多い彼としては、専断政治抜きでは、思い切った復興も教育・経済などの施策も実行不能であっただろう。

下ってサラザールの時代ともなると、国力の低下はいっそう進み、光はより薄く、影はより暗さを増した。エンリケ航海王子とヴァスコ・ダ・ガマらの造り上げた十六世紀ポルトガルの輝かしい海洋帝国を語ることは、長くなりすぎて省かざるを得ないが、それは十八世紀の大地震以後下降線をたどる一方でついに一度もあたらしいピークを迎えることがなかった。大航海時代に形成された帝国が重荷になってもそれを切り捨てることもままならなくなっていた。第二次大戦後他の強国が次々に植民地・属領を手放してゆくなかで、もっとも帝国を維持する力に欠けた小国ポルトガルだけが大帝国の夢に執着し続けたのは悲惨であり滑稽でさえあった。これはサラザール独裁の悪しき帰結と言おうか、伝統主義的保守の看板が彼を金縛りにしたのである。偉大な過去はしばしば厄介な存在である。カーネーション革命は独裁政治からの解放だけでなく、帝国のしがらみからの解放の側面もあった。

さらにいうと、サラザールの「新国家」経済は、高速道路やサラ

ザール橋（のちに四月二十五日橋と改名）、国立競技場の建設といった大規模公共事業によってかろうじて支えられていたのだが、その原資のかなりの部分はナチスの略奪品のヨーロッパからの秘密搬出を組織的に黙認・補助することによって稼ぎだされたとも言われる。暗い過去が表層的繁栄の基礎を提供したのである。

そもそも第二次大戦の初め、一九四〇年にはパリが陥落しロンドンが炎上しているとき、リスボンでは万博が行われるという信じがたい明暗の対比が生まれていた。翌年ベルリンにも空襲警報が常時鳴り響いているときも、リスボンでは煌々と灯りが点されていた。古くはレマルクの『リスボンの夜』（一九六二）でおなじみの、もつと新しくはロバート・ブラウンの、一九九六年にCWAゴールデン・ダッガーをとった大河ミステリ『リスボンの小さな死』の冒頭近くにも登場する印象的な場面である。「ナポレオン以来の策士」といわれたサラザールのきわどい中立外交の「成果」だった。

ブラウンはオクスフォード出、ポルトガル在住のルポライターで土地にも歴史にも明るい。本の主人公の警官はカーネーション革命の四年後に五年間のロンドン暮らしを切り上げて帰国、都心のロツシオ駅に降り立ったとたんにこの街ではいまだに「貧困の喧騒」——アフリカのいたるところに見られる飢餓と不安でいっぱいのもので——が支配していることが分かったという。警官以外に職は見つからなかった。軍事独裁時代の秘密警察への反感から、警官はまだ嫌われものだった。同じ頃にポルトガルを訪れた私の印象でも、警官と聖職者の寒々

と目立って見える国であった。

ロツシオ駅に通じる階段通りの下町住民の生態を描いた映画「階段通りの人びと」（一九九四）はおそらくこの時期を対象にしたものだろう。まず冒頭、早朝に起き出してきた老女が自宅前の路上に悠々と放尿する場面に度肝を抜かれ、何が始まるのかと思う。老いた盲人に物乞いを公認する銭入れ函をめくってやっかみからの争いが絶えず、ついにはアメリカの観光客の眼前で殺人が起こる。しかし、役所が障害者の「自立」の資に乞食を公認するというのはこの時期のリスボンの空気を伝えていて面白いし、チンピラ殺しで夫が投獄され箱を盗まれた父が自殺したヒロインが、その物語を語り歩くことで父以上に稼いで近所を潤し聖女扱いされるといふ結末なども、どこかメルヘンばい土地柄を示しているように思えてならない。

一九八八年に三回目に訪ねたこの国は、さらに様相が変わっていた。よほど普通のヨーロッパの国に近づき、それでいて西ヨーロッパの田舎のよさは残っていた。

リスボン近くのセトゥバルでのこと。美術館の閉館前に入ろうと焦って道に迷い、来合わせた警官に尋ねたらバイクにまたがって私たちのレンタカーをずっと先導してくれた。先導といえば、その二週間後北部の町では一方通行を逆走しかけたところで気づき立ち往生していたら、パトカーが来合わせて何とそのまま逆走を先導してくれ、笑顔で手を振って去った。警官が多いというのもわるくないかと思っただ。さてその市立美術館に息せき切って転がり込んだら、館員が時間

超過はおかまいなしに付きつ切りで見どころを解説してくれ、最後に隣接している写真禁止のイエズス聖堂内部をのぞける開口部にわざわざ案内してくれ、ここからだと言真が撮れますよと微笑んだ。恥の上塗りを覚悟でいうと、そのあと食事のさい車内にキーを閉め込んだのだが、居合わせた年輩の男性がじつに親切に動いてくれ、彼からバトンタッチされた郵便局長さんがフォード（車種はフィエスタ）の修理工場まで連れて行ってくれ、工場主は工場主で、かかった費用を保険で落とせるようにしてくれた。私のようなつかりものが旅するのにこんな都合のいい、牧歌的ともいえる国が地球上にあるのかという思いに充たされた一日であった。

翌日リスボンでムーア人地区であるアルファマの狭く暗い路地を歩いていて、十年前に比べ、人通りがなく見通しの悪い場所でも怖さがうすれたことに気づいた。妻も変わったねとつぶやいた。そういえば前は必ず妻を前にして歩いた。そうさせる空気があった。けれどそのまた十年前には物騒な気配を感じなかったことを思い出した。その類いの話をすればキリがないが、アンデルセンの一八六六年の三か月逗留の際も、数年前に辺りを震え上がらせていた盗賊は処刑され、いまはコペンハーゲン同様に天下太平ですよと聞かされるくだりがある（『ポルトガル紀行』鈴木徹郎訳）。治安状況一つをとっても目まぐるしく変わる国なのである。それは小国であることと関わりがある。小さい国はシンガポールのように法律一つで世界一清潔な街に変身可能な身軽さを持つ。

「宿命の女」の都

時代をかくも敏感に映し出すのは、しかし小国たるがゆえばかりではあるまい。この国、この街の他の何がさせるわざなのであるうか。

「人が都市をつくる」と最初に書いた。そしてリスボンの街の相貌が十六世紀、十八世紀、そして二十世紀に強力なリーダーの存在によってまったく別のものになったのではないかと語ってきた。ただ、ここまで書き進めてきて改めて思うのだが、リスボンは一方的に彼らに造り替えられたのではなく、この街の個性もまた何らかの役割、反作用を演じたのではないか。

ここはそのときどきで表情がまったく変わって見える美女のような都市である。ポーヴォワールの言うように女はつくられるのであるが、女もまた男をつくる。リスボンほどの美女が支配者をも変えないわけではない。

リスボンはポルトガルの首都であり、この国がいくつかの点で本質的に不安定なポジションに立ち、矛盾を抱えた国であることの影響を受けざるをえない。まず人口一千万の小国であること。ベルギー、ギリシャ、ハンガリーなみの人口でありながら、首都圏人口は四百万近くもあって、圧倒的に比重が高い。アテネでさえ三百万。だれがどう、この頭でつかちな都を養うのであろうか。

不安定性はさらに、お隣に言語・歴史・人種の近いスペインという歴史的大国を持つていること、両国の関係は近親憎悪とまでは言わぬとしても、必ずしも良好ではなく、お互い、とくにポルトガル側では

悪口しか聞かれない間柄であること、たえず併呑の脅威にさらされてきたことに由来する。それを避けるためには外に頼りを求めざるをえない。「外」の一つはみずからが造り上げてきた旧帝国権益であった。しかし、旧植民地といつてもブラジルはいまや旧宗主国をはるかにしのぐ大国であり、歴史的にも古くから並び立つ二重王国を形成し、ナポレオン戦争のときは政府はブラジルに引越したほどであった。尻尾が犬を振り回しかねない力関係があった。

もう一つは「世界最古の同盟」の相手方の国イギリスであった。イギリスがいかに特別な存在であるかについてはワインの結ぶ縁がよく語られるが、それだけではない。「リスボンの小さな夜」にも、いくら金を積まれても脅かされてもドイツ側に軍需物資を売らないイギリスびいきの実業家が描かれている。ブラジルへの引越しを可能にしたのもイギリス艦隊であり、代償にイギリスは金本位制を実施できるだけの金をちやっかりブラジルからむしり取った。けれどもいまはもうポルトガルを支えるのがイギリスではなく、EUであることは周知のことになっている。もう一つのスペインの脅威回避策は臨機応変の機動的な外交であり、そのためには独裁制に頼るのがポルトガルの選択であったが、そうした時代も過去になった。

さらに微妙なことには、スペインとの関係についても国民の方向性が一様ではなくなった。

ポルトガル語圏で唯一人のノーベル文学賞受賞者であるジョゼ・サラーマゴ（一九二二—二〇一〇）はポルトガル共産党員作家でありな

がら、スペインとの政治的統合をめざす「イベリスモ」を唱えてきた。いまスペイン領であるイベリア半島北西端のガリシア地方はもとポルトガルと言語的にも民族・文化的にもほとんど同質の地域であるなど、現在の両国国境の線引きは人工的・恣意的なものであることは事実だし、半島全体の統合に少なからぬ利益があることもたしかなのである。

そうなる तोリスボンの立ち位置はいつそう微妙さを加えるだろう。

ここは首都の座をかつてナポレオン時代に、十四年間モリオ・デ・ジャーネー口に移さざるをえなかった経験があるが、今後はもしかしたらマドリッドに奪われたりするかもしれないという奇妙な危うさ、座り心地の悪さにさらされることになる。

けれどもそれは、この街に没落貴族の荘園にも似たはかない彩りを添えることにもなった。ファドも、街の舗道のアズレージョの藍もそうしたものが見ることができるともいえない。

同時に、しかし、衰退をつづける小さな国を、遠く天正少年使節の時代から第二次大戦中の灯火管制下のヨーロッパの、そこだけが眩しいばかりに明るい自由への脱出口となった時代まで、常に世界史の舞台から外させなかった、したたかだしなやか、自己の魅力や地位を活かすすべを心得た魔性の美女——「宿命の唄」ファドに引掛けて「宿命の女」——の都の側面も忘れてはなるまい。そこを舞台とするサラザールの外交にはイギリスをも手玉に取る妖術的巧妙さがあつた。日本の外交官を心服させるなど朝飯前のことでしかなかったかもしれない

い。ヨーロッパの最西端に立ち、産業らしいものとてもない夕陽の街の人口（首都圏レベルで）が、ベルリンよりもローマよりも、ウィーン、アムステルダムよりも大きくなっている不思議さ、また大地震の後「そんな道路が必要なのか」と揶揄的にされた百メートル道路が今や渋滞に悩むようになり、一九九八年の「海」をテーマにした万博を契機に、都心の周辺に広がる郊外地域は海洋館、カジノ、シヨッピングセンター、鉄道駅、パヴィリオン、橋梁や塔など、眼をみはるばかりの現代建築に埋め尽くされ、ヨーロッパ有数の未来都市のサンプルに変貌した不思議さの持つ意味はあらためて考え直してもよいのではないか。

人口比較は朝日新聞社『知恵蔵なっとく世界地図2015-6』による。